

福島県・浜通りの原発隣接地への住民の帰宅が始まっている。現地に行つてそうした話をお聞きし、いくつかの新しい試みに接する機会があった。その一つが、大熊町にあるイチゴ農園のネクサスファームおおくまである。東北地方で一番大きな規模であるそうだが、巨大なハウスの中でテクノロジーを駆使して生産を行っている。

このハウスは、農園というよりは巨大工場という感じだ。水分や養分はもとより、二酸化炭素供給や温度管理まで、全てコンピューターで制御されている。人間が行う仕事はないわけではなく、機械にできるところは徹底的に機械化した上で、人間にしかできないところを労働者の作業に任せるという形になっている。

イチゴの生産は冬だけでなく夏も通じて一年中行われており、生産量

東京大名誉教授(国際経済学)

### 伊藤 元重

## 論壇

を年間通じて安定化させることで、需要者の要望に応える。主たる需要者はコンビニや外食産業などで、一年を通じた安定的な供給を求めている。徹底した機械化が進んでいるので、放射線量の全数チェックなども容易に行うことができる。

原発事故によって帰宅困難地域であったところに住民が戻ることができるとは、その地域で雇用機会

## 未来の農業ゼロから作る

が確保されることが重要である。イチゴ生産の責任者は労働者を確保できれば、生産をまだまだ増やせると言っていた。この地域への今後の住民の帰還や他地域からの住民の移住が始まれば、重要な雇用機会を提供できると期待される。

被災地の事業であるということ、農業工場の大規模機械化の費用

には政府の補助金などが入っている。そうした支援がなければ、短期間でこれだけの規模の農業工場を立ち上げることは困難だっただろう。ただ、実際にできた農業工場の稼働状況を見ると、こうした大規模機械化が日本の未来の農業の一つのあり方であり、被災地でなくてもこうした取り組みをしていくべきだと感じた。

こうした近代的な農業の姿を考えると、必ず思い浮かぶのがオランダの農業の姿である。オランダは面積では九州ぐらいしかないが、農業輸出額では世界第2位の規模である。耕地面積が小さくてもそれだけの輸出が可能なのは、徹底した技術の活用と大規模化で、品質が優れ価格の安い農産物を生産することが可

能であるからだ。そうした動きを支えているのは、技術への挑戦こそが未来の農業を育てる最良の方法であるという信念があるからだろう。農業者はもちろん、大学などの研究機関、自治体や地域の企業などが、連携して未来型の農業に取り組んでいる。そうした中で、技術に習熟した若い世代も多く育っている。

旧来型の農業経営では、こうした新しい農業へのチャレンジはなかなか難しい。そこで、未来の農業をゼロから作り上げるといような発想が必要なのかもしれない。もちろん、従来の農業者の経験や知識を生かすことは重要だし、旧来の農業との共存も可能はずだ。そして、食糧の安全保障ということで、国内での農業を強化することにもつながる。

\*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。